

一 次の①～⑤の―線部の漢字には読み仮名をつけ、⑥～⑩の―線部の

の仮名は漢字に直して書きなさい。必要に応じて送り仮名もつけなさい。

- ① 見解を異にするグループ。
- ② 別れの言葉を胸に刻む。
- ③ 善良な心の持ち主。
- ④ 晩秋のさびしい景色。
- ⑤ 明朗な人柄が買われた。
- ⑥ 条約がカイセイされる。
- ⑦ シジツにもとづく小説。
- ⑧ 地位と名声をきずきあげる。
- ⑨ ブンブ両道を修める。
- ⑩ シャワーをあびる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

おぼさんの息子は、タケシくんという。三年生の秋、交通事故で亡くなった。生きていれば東小学校の五年生――少年と同じ五年二組だったかもしれない。仏壇に供えられた超合金ロボやトレーディングカードは少年の好きなものと一緒だったから、仲良しの友だちになれた、かもしれない。

おぼさんは東小学校のことをあれこれ教えてくれた。髪かみの薄うすい校長先生のあだ名が「はげっち」だということ、秋の運動会に親子競技があること、冬になるとクラスでストーブ委員を決めること、学校のプールは真ん中が深くなっていて背が立たないかもしれない、ということ……。

ヨッチャンの名前が出た。胸がどきんとした。タケシくんのいちばんの友だちはヨッチャンだったらしい。

「ヨッチャンと同じクラスなの？　じゃあ、もう友だちになったでしょ。あの子元気だし、面白いし、意外と親切なところもあるから」

タケシくんが小学校に上がって最初に仲良くなったのがヨッチャンで、最後まで――いまでもヨッチャンは、ときどき仏壇にお線香せんこうをあげに来てくれるのだという。

「ヨッチャン、いろいろ面倒めんどう見てくれるから、すぐに友だちになれたでしょ」

少年は黙だまってうなずいた。一週間前までは、確かにそうだった。通

学路の近道も、学校でいちばん冷たい水が出る水飲み場の場所も、教室を掃除するときの手順も、ぜんぶヨッチちゃんに教わった。

「①」

お婆さんはうれしそうに微笑んで、しみじみとつぶやくように言った。勘違い——でも、そんなの、打ち消すことなんてできない。

「②」

お婆さんはもつとうれしそうに言った。

少年がしかたなく「はあ……」と応えると、玄関のチャイムが鳴った。

外からドアが開く。

「お婆ちゃん！ こいのぼり、黒いのがなくなってる！ 飛んでったんじゃないの！」

玄関に駆け込んできたのは、ヨッチちゃんだった。

五時のチャイムが鳴るまで、少年はヨッチちゃんと一緒にタケシくんの家に行った。お婆さんに「やろう、やろう」と誘われて、三人でテレビゲームをした。タケシくんの家にあったゲームはみな、少年も三年生の頃に遊んだものだった。タケシくんが生きていれば友だちになったよな、絶対そうだよな、と少年は思う。去年発売されたシリーズの新作はもつと面白い。タケシくんが生きていれば絶対にハマっただろうな。

ヨッチちゃんはゲームがうまかった。少年といい勝負——勝ったり負け

たりを繰り返す二人を、「ひさしぶりにゲームをすると、指と目が疲れちゃうねえ」と途中から見物に回ったお婆さんは、にこにこ微笑んで見つめていた。

ヨッチちゃんと仲直りをしたわけではない。ヨッチちゃんは家に入って少年を見たとき、一瞬、なんでおまえなんかがここにいるんだよ、という顔をした。少年も、しょうがないだろ、とにらみ返して、そっぽを向いた。

お婆さんがジュースのお代わりを取りに台所に立ったとき、「さっさと帰れよ」とヨッチちゃんに小声で言われ、肩を小突かれた。

少年も最初はそうするつもりだった。お婆さんに嘘がばれるのが嫌だったし、嘘をついたままタケシくんの写真に見つめられて遊ぶ自分が、もつと嫌だった。

でも、お婆さんはジュースを持って戻ってくると、二人に言った。

「タケシも喜んでるわよ、ヨッチちゃんに新しいお友だちができて」

帰れなくなった。③頬が急に熱くなり、赤くなつて、そこからはいま

まで以上にゲームに夢中になったふりをした。ヨッチちゃんも、ゲームのコントローラーを動かしながら、ときどき、テレビの画面を見つめたまま話しかけてくるようになった。そんな二人を、お婆さんはずっと——ほんとうにずうっと、にこにこうれしそうに見つめていた。

先に「さようなら」と言った少年が団地の建物の外に出て、ヨッチちゃんはなかなか出てこなかった。放っておいて帰るつもりで自転車にまたがったが、④このまま帰ってしまうのも、なんとなく嫌だった。

困ったなあと思ってタケシくんの家のベランダを見上げていたら、窓が開いて、おばさんがベランダに顔を出した。少年に気づくと、「ちょっと待っててね」と笑って声をかけ、フェンスからこいのぼりの竿さおをはずした。

しばらくたつて外に出てきたヨッチちゃんは、真鯉まごいだけをつないだ竿を持っていた。

「すぐ帰らないとヤバイ？」

少年に顔を向けずに訊きいた。

「べつに……いいけど」

「片手ハンドル、できる？」

「自転車の？」

簡単だよ、そんなの、と笑った。道が平らだったら両手を離しても漕こげる。

ヨッチちゃんはこのぼりを少年に渡した。

⑤「おまえに持たせてやる」

「……どうするの？」

「ついて来いよ。タケシのこいのぼり、ぴんとなるように持つてろよ」

そう言つて、自分の自転車のペダルを勢いよく踏み込んだ。

少年はあわてて追いかける。風を呑み込んだこいのぼりは、尾びれまでぴんと張って泳ぎはじめた。意外と重い。しっかりと竿さおを握にぎっていないと、飛んでいってしまいそうだ。

ヨッチちゃんの自転車は団地ぬを抜けて、細い道を何度も曲がっていく。

片手ハンドルの運転ではなかなかスピードを上げられない。ヨッチちゃんも途中でブレーキをかけたり自転車を停めたりして、少年を待ってくれた。「かわつてやろうか」と言われて、「ぜんぜん平気だよ」と応えると、ふうん、と笑われた。いままでとは違う——転校したの頃とも違う笑い方だった。タケシくんと一緒だった頃もこんなふうに笑っていたのかもしれない。⑥そう思うと、急にうれしくなり、でも急に悲しくもなつて、竿をぎゅつと強く握りしめた。

（重松清「小学五年生」より）

問一 少年とタケシくんの共通の趣味（好きなもの）は何ですか。本

文中から二十字以内で書きぬきなさい。

問二 ヨッチちゃんの性格・長所を本文中の言葉を使って、三十字以内

にまとめて書きなさい。

問三 (①) (②) にあてはまる言葉を次の **ア**、**エ** から一つずつ

つ選び、記号で答えなさい。

ア じゃあ、ヨっちゃんとも友だちってことだね

イ じゃあ、タケシとも友だちってことだね

ウ そうかあ、ヨっちゃんとも友だちかあ……

エ そうかあ、タケシとも友だちかあ……

問四 — ③ 「頬が急に熱くなり、赤くなって、そこからはいままです

上にゲームに夢中になったふりをした。ヨっちゃんも、ゲームのコントローラーを動かしながら、ときどき、テレビの画面を見つめたまま話しかけてくるようになった」とありますが、このときの二人の気持ちについて説明した次の **ア**、**エ** の文の中から最もあてはまるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア タケシくんのおばさんの言葉に感動して、今まで以上に仲の良いところを見せようとしている。

イ タケシくんのおばさんの言葉を裏切らないよう、一生懸命仲の良いところを見せようとしている。

ウ タケシくんのおばさんの言葉も耳に入らないくらい、ゲームに熱中し意気投合している。

エ タケシくんのおばさんの言葉に反発を感じ、ゲームに熱中したふりをよそおっている。

問五 —④「このまま帰ってしまうのも、なんとなく嫌だった」とありますが、このとき少年はどうしたかったと思いますか。二十字以内で書きなさい。

問六 —⑤「おまえに持たせてやる」とありますが、これはだれがだれにどういうつもりで言ったものですか。次のア～エから最もあてはまるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 少年がヨっちゃんに、必要のないこいのぼりを無理に押しつけようとした。

イ 少年がヨっちゃんに、とても大切なこいのぼりをゆずってあげようとした。

ウ ヨっちゃんが少年に、必要のないこいのぼりを無理に押しつけようとした。

エ ヨっちゃんが少年に、とても大切なこいのぼりをゆずってあげようとした。

問七 —⑥「そう思うと、急にうれしくなり、でも急に悲しくもなつて、竿をぎゅつと強く握りしめた」とありますが、このときの少年の気持ちを説明しなさい。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

お互いに自分の過去をふりかえって、とにかくここまでやってこられたのはだれのおかげか考えてみると、たいていは、（ ① ）人が頭に浮ぶのである。ある老俳人は、ほめられたからこそ、ここまです歩したとしみじみ^{じゅっかい}述懐している。ほめてくれた批評によって伸びた。けなされたことからほとんど^{ひえき}*裨益されなかったというのである。

友には、ほめてくれる人を選ばなくてはいけなが、これがなかなか難しい。人間はほめるよりもけなす方がうまくできている。いわゆる頭のいい人ほど、（ ② ）を見つめるのがうまく、（ ③ ）を発見するのがへたなようである。

ほめられると、われわれの頭は調子に乗る。つい勢いづいて、思いもかけないことが飛び出してくる。

④ ピグマリオン効果というのがある。四十人の生徒のいるクラスを二十人ずつ二つのグループでA、Bに分ける。学力はAB平均して同じようにしておく、まず第一回のテストをする。Aのグループには採点した答案をかえすが、Bのグループの答案は見もしないで、教師がひとりひとり生徒を読んで、テストの成績はよかったと告げる。もちろんでたためである。

やがてしばらくしてまた、第二回のテストをする。前と同じようにAグループには点のついた答案を返し、Bグループにはひとりひとり

を呼び出して、こんどもよくできていた、と答案は見せず、返さずに伝える。生徒はいくらか不審^{ふしん}に思うが、ほめられるのは悪くない。あまりうるさいせんさくはしないでそのままにしてしまう。

こういうことを何度かくりかえしたあと、こんどは全員の答案を採点、AB両グループの平均点を出してみる。すると、ほめていたBグループの方がAグループより点が高くなっている。これがピグマリオン効果と呼ばれるものである。

まったく根拠^{こんきょ}なしにほめていても、こういう（ ⑤ ）がある。まして、多少とも根をもったほめことばならば、かならずピグマリオン効果をあげる。まわりにうまくほめてくれる人がいてくれれば、いつもはおずおずと臆病^{おくびょう}な思考も、気を許して、頭を出してくる。雰囲気^{ふんいき}がバカにならない。いい空気のところでない、優れたアイデアを得ることは難しい。

考えごとをしていて、うまく行かないときに、くよくよしているのがいちばんよくない。だんだん自信を失って行く。論文や難しい原稿^{げんこう}を書いてる人にしても、書齋^{しよさい}にこもりっ切りで勉強をしているタイプと、ちよいちよいいたいたした用もないのに人に会うタイプとがある。

ちよつと考えると、籠城^{ろうじやう}している人の方がいい論文を書きそうであるが、⑥ 実際は人とよく会っている人の方がすぐれたものを書くようだが、仲間と話をする。みんな、ダメだ、ダメだ、と半ば口ぐせのように言っている。それをきくだけで、自分だけ苦労しているのではない。まだ、ましな方かもしれないと思う気持ちになる。間接的にほめられて

いるようなものだ。帰ると意欲がわくということになる。一人でくよくよするのは避けなくてはいけない。人と話すのなら、ほめてくれる人と会うようにする。批評は鋭い^{するど}が、よいところを見る目のない人は敬遠する。

見えすいた（⑦）のようなことをきいてどうする。真実に直面せよ。そういう勇ましいことを言う人もあるが、それは超人的な勇者である。平凡な人間^{へいぼん}は、見えすいたことばでもほめられれば、力づけられる。（⑦）だとわかっていても、いい気持になる。それが人情なのではなからうか。

われわれは、どうもお世辞^{せじ}を言うのにてれる。見えすいたことを口にするのを恥^はじる。しかし、どうせ、あいさつには文字通りの意味はないのである。朝寝坊^{あさねぼう}した人でも人は「お早よう」と言う。ほめるのは最上のあいさつで、それによって、ほめられた人の思考は活潑^{かつぱつ}になる。

（外山滋比古「思考の整理学」より）

＊述懐^{じゅつかい}……心中の思いを述べること。

裨益^{ひえき}……利益となること。役にたつこと。

活潑^{かつぱつ}……生き生きとして勢いのよいこと。活気のあること。

問一（①）にあてはまる言葉を本文中から六字で書きぬきなさい。

問二（②）（③）にあてはまる対義語（二字熟語）を考えて、それぞれ漢字で書きぬきさい。

問三 — ④「ピグマリオン効果」について本文に書かれている内容をまとめた次の文の（ ） **ア** **イ** **エ** にあてはまる言葉を、本文中から書きぬきなさい。（同じ記号には同じ言葉が入ります。）

・（**ア**）が（**イ**）に期待する、すなわち（**ウ**）ことによつて、（**イ**）の（**エ**）が向上すること。

問四 (⑤) にあてはまることわざを次の **ア**、**エ** から一つ選び、
記号で答えなさい。

ア ウソから出たマコト	イ 泣き面にはち
ウ 灯台もと暗し	エ ぬかにくぎ

問五 — ⑥ 「実際は人とよく会っている人の方がすぐれたものを書く
ようだ」とありますが、その理由を本文中の言葉を使って説明し
なさい。

問六 (⑦) には同じ言葉が入ります。あてはまる言葉を本文中
から三字で書きぬきなさい。

問七 この文章で筆者が言いたかったこと(要旨)を書きなさい。

2018年度 武蔵野東中学校 入学試験 国語 解答用紙

*のらんには何も記入しないこと

受験番号

氏名

一

⑥	①
⑦	②
⑧	③
⑨	④
⑩	⑤

*

二

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
				①		
				②		

*

三

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	
				ウ	ア	②	
						③	
				エ	イ		

*
